

高等学校総合学科のカリキュラムに関する事例研究

——生徒の選択履修状況及び進路結果のクラスター分析を中心に——

A case study on analysis of curriculum for the integrated course for upper secondary level

—— Focusing on the investigation for the situation of student's subject choice
and course results after graduation by cluster analysis ——

佐藤 史人 太田 政男 原 健司
Fumito SATO Masao OTA Kenji HARA
(和歌山大学) (大東文化大学) (元埼玉県立大宮光陵高校)

林 萬太郎 阿部 英之助
Mantaro HAYASHI Einosuke ABE
(大阪大学) (名古屋大学)

2016年10月4日受理

抄録

本研究は、総合学科における生徒による科目選択履修の状況についての調査結果に基づいて、生徒個人単位の選択履修及び進路結果との関連について分析を行った。分析の手法としてはクラスター分析を用いて履修の特徴を分類し、「各クラスターの履修の特徴」と「課題研究の分野」及び「進路結果」の関係について検討した。事例として取り上げた調査対象校においては、生徒の多様な希望や興味・関心に対して、自己の進路を自覚的に見いだす進路選択が実現しており、総合学科としての機能が十分発揮されていることが明らかになった。

キーワード：カリキュラム、進路指導、キャリア教育、総合的な学習の時間

1. はじめに

戦後の新制高等学校は「高度な普通教育及び専門教育を施すことを目的とする」(学校教育法第50条)と定められており、総合学科設立以前においても、普通教育と職業教育の両方をすべきことが佐々木享などを中心に指摘されてきた。しかし、実際には当初の理念・目的からやや乖離し、普通科と職業科の併存という状況が長く続いてきた。そうした経緯の中で、高等学校総合学科は、「普通科と職業科とを統合するような第3の学科」として1994年制度化された。当時の第14期中央教育審議会答申「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」(1992年4月)によれば、総合学科創設にあたり「生徒の選択の幅を広げ、個性の伸長を図る観点」を掲げており、それは生徒ひとりひとりの多様な生き方や進路選択に対応できるように、幅広く設定された選択科目の中から生徒が自分で科目を選択することを目指し、構想されていた。これを科目設定・選択のシステムとしてより発展させるねらいで、単位制の活用をも提言していた。当時の答申にはこの他にも、例えば「学校・学科間の移動をしやすくするため各学校、学科に一定幅の編入学定員枠を用意すること」

なども盛り込まれていたけれども、総合学科の特徴は、第一に普通教育と専門教育の統合、第二に単位制の活用であり、これによって多くの選択科目の設定が可能となり、それを生徒が比較的自由に選択・履修できるという独自性が生まれたといえる。こうした総合学科の独自性が最も表出するのがカリキュラム構成である。

総合学科は現在でも、生徒・保護者の要望、当該高校の立地・実績、地域の実情等により、独自の教育を実践し、成果を上げている高校も少なくない。例えば総合学科制度化の当初に設立された和歌山県立和歌山高校では、上記のような問題や課題に直面してもなお多くの選択科目を用意するカリキュラムを維持しており、総合学科の特性を生かした教育活動が行われていることはこれまでの調査によっても明らかになっている。しかし、実際の単位履修に伴っては、取得の容易な授業や作業・実習の多い授業の選択など安易な履修実態、授業の空き時間の過ごし方に生徒指導上の配慮が必要になるなど、本来の趣旨である普通教育と専門教育の統合から外れ、科目選択を完全に生徒に委ねることが困難になり、独自のカリキュラム編成を変更し、系列やコース制を設定する総合学科が見られるように

もなってきた。また、総合学科創設の当初には、キャリア教育の必要性は指摘されていなかったが、多様な専門教育の実施は卒業後の進路にも関わり、その後のキャリア教育との関係も検討しなければならない。

総合学科創設から既に20年以上が経過し、その存在意義を客観的に評価する時期が到来している。多様性を担保するためのカリキュラムに特徴をもつ総合学科では、その教育的効果や成果を評価するためには、当然カリキュラムそのものの分析と生徒ひとりひとりの多様性との関連を検討することが必要となってくる。とりわけ生徒の進路選択・決定との関連は、これまでも研究が進められている。総合学科創設当初には、大河内信夫の一連の研究があり、進路選択・決定と科目履修の関係について詳細に検討している。さらに、総合学科における生徒の進路選択や履修科目選択に関わる先行研究としては、近年では小西尚之による継続的な研究がある。そこでは、入学から卒業するまでの3年間にわたり、年一回のパネル調査を通じて、進路意識や科目選択を通じた進路決定や卒業後にもわたる職業観の変化などを多岐に分析している。こうした研究の蓄積に基づいて、より詳細な実証的調査、研究によって、総合学科の役割や意義について検討を深めることが重要であり、本研究ではその一端を事例研究として取り組む。

2. 本研究の目的

学校の教育活動の成果を検討する際に最も重視しなければならないのは、実際の教育実践すなわち授業である。実際の授業の分析・検討は、生徒の実態や担当教員の力量や経験に大きく影響を受けるので、まずは客観的な検討材料としてカリキュラム(教育課程表)を取り上げる必要がある。小・中学校に比べて、高校におけるカリキュラムはほとんど同一のものは存在しないと言えるほど多様、個別的であり、特に総合学科の特徴である選択科目の豊富さは、教育課程表そのものに加え、生徒の履修の実態はさらに複雑である。総合学科のカリキュラムの実態が生徒の進路選択・決定のプロセス、つまり教育実践においては進路指導に影響を及ぼしていることは以前から指摘されており、本研究においても同様の視点からの検討が重要であると考える。

そこで本研究では、総合学科における選択履修がどのように行われているかを、生徒が実際に選択した結果についての調査をもとに、選択科目と単位数に焦点を当ててその実態を明らかにする。総合学科における科目選択の方法については学校により大きな違いがあるが、ここでは比較的自由な選択をさせる総合学科高校1校の協力を得て調査対象とし、入学から卒業まで選択履修がどのようにおこなわれたかについて、生徒個人単位の選択履修状況及び進路結果から分析を行っ

た。分析の手法としてはクラスター分析を用いて履修の特徴を分類し、「各クラスターの履修の特徴」と「課題研究の分野」及び「進路結果」の関係について考察した。

3. 調査対象校の概要とカリキュラム

(1) 調査対象校の概要

調査対象校のA県B高校は総合学科のみを設置する全日制共学校である。各学年の学級数は6クラスであり、人文社会系列、自然科学系列、芸術・スポーツ系列、生活福祉系列、国際文化系列、環境科学系列、食品科学系列、情報ビジネス系列の8系列を設置している。

B高校は地方中核都市から電車利用20分程度の近郊に位置する。生徒の卒業後の進路は大学進学3割、短期大学進学2割、専門学校進学3割、就職1割、進学準備その他1割である。調査対象生徒は2015年4月時点における3年次生で男子92名(38%)、女子148名(62%)の合計240名である。生徒数は転学・退学等により変化して、2016年3月の卒業生数は236名である。

調査は2014年から2016年にかけての複数回の学校訪問により、学校長、担当教員、生徒と直接面接し、聞き取りをおこなった。情報管理については、生徒氏名、成績などの個人情報的一切削除して番号づけられた履修科目データ及び進路結果によって分析を行った。

(2) 調査対象校のカリキュラムと履修指導

B高校での3年間のカリキュラム表を概観すると、総合学科の原則履修科目である「産業社会と人間」は1年次生で2単位、「総合的な学習の時間」は2年次生で1単位、3年次生で3単位である。3年次生の「総合的な学習の時間」のうち2単位は「総合研究」(総合学科の原則履修科目の「課題研究」である。本稿では以下「総合研究」と称する)として実施している。必修科目は、1年次生では「地理A」「現代社会」「科学と人間生活」「生物基礎」「保健」「芸術(書道I、美術I、音楽I、工芸Iから科目内選択)」「社会と情報」「数学I」「国語総合」「コミュニケーション英語I」「体育」の11科目28単位を履修し、2年次生では「世界史A」「保健」「家庭基礎」「体育」の4科目8単位を履修する。3年次生では「体育III」「総合研究」の2科目4単位を履修する。また、特別活動(LHR)は各年次1単位を必修とする。週当たり授業時間数が1年次31単位、2年次・3年次30単位であり、空き時間を認めていないので、総合選択科目及び自由選択科目は2年次生で20単位、3年次生で24単位を選択履修することとされている。

カリキュラム表における総合選択科目及び自由選択科目を講座名で数えると165科目となる。2年次で60科目、3年次で105科目であり、うち31科目は2年次生と

3年次生のどちらでも履修できる様に設定されている。普通科目が74科目、専門科目が91科目で、うち学校設定科目は普通科目29科目、専門科目8科目である。

講座名は生徒が科目選択時に使用するもので、時間割はこれにより構成される。講座名は学習指導要領における科目名とは必ずしも一致せず、学習指導要領に基づく一つの科目をいくつかの講座名に分けて複数の講座とすることもある。そのため、学習指導要領に基づく履修順序の制限の他に、学校独自の講座履修順序等の制限が存在する。また、学校設定科目が37科目あり、これらの講座名は科目名と同じである。

表1に2年次生及び3年次生の総合選択科目及び自由選択科目の講座名と単位数、及び学習指導要領に基づく科目名の一覧を示した¹。

実際の進路指導としての科目選択の方法は、たとえば系列別に選択枠を設けるなど様々であるが、B高校はできるだけ自由に選択させる方法をとっている。生徒の履修指導は、2年次の選択科目については1年次の「産業社会と人間」の時間に、3年次の選択科目については2年次の「総合的な学習の時間」で行われる。

具体的には、2年次の選択科目の決定においては、1年次の6月、9月、10月、12月の年4回選択希望調査が行われている。1回目は対象選択科目から生徒に自由に選択させる。その受講希望人数等を勘案し2回目の希望調査時に開設科目群(2単位科目が複数配置された10個の群。B高校では「帯」と呼ぶ。時間割表で带状に示されているため)が示される。生徒は各帯から1科目(2単位)ずつ、合計20単位分を選択することになる。3年次の選択では必修科目である「体育Ⅲ」及び「総合研究」を含めて帯の数が14個になるが手順は同じである。14個の帯からの選択により「体育Ⅲ」2単位と「総合研究」2単位と総合選択科目及び自由選択科目24単位との合計28単位を選択する。

以上のことから、教育課程表で示されたすべての講座が開設されるわけでは無い。講座の開設科目群(帯)は1回目の生徒の希望と各教科の教員数等を勘案して設定する。入学から卒業までの3年間に開設されなかった講座は表1の単位数の右に※印で示した。

実際に開設された総合選択科目と自由選択科目の開設科目数及び開設率は、2年次で普通科目21科目(81%)、専門科目22科目(65%)、3年次では普通科目41科目(85%)、専門科目44科目(77%)である。2年次・3年次の両方に同一講座が用意されている科目で、片方の学年の開講の必要が無くなった場合も多々見受けられる。学年重複を考慮せずに数えると、選択科目134科目中113科目(84%)が開設されている。

科目選択全体の特徴としては、まず2年次の「コミュニケーション英語Ⅱ」を選択しなかった者は全体で2名であり、ほぼ必修化(履修率99.2%)した状況にある。また、3年次の「コミュニケーション英語Ⅲ」も

選択者210名(履修率87.5%)であり、この2科目が履修率1位と2位でもある。履修率3位以下は「数学Ⅱ」80%、「現代文A」70%、「発展現代文」70%と続き、6位以下は履修率43%以下である。

一方、履修者が少なく10人未満で開講された科目は「異文化理解」9人、「英語会話」8人、「ファッション造形基礎」8人、「地理B」8人、「実用書道」7人、「野菜」6人、「中国語」6人、「発展簿記」5人、「食品化学」4人、「グローバルビジネス」4人、「総合実践」1人の11科目である。これ以外に履修人数は10名を超えているが、2年次生と3年次生に分けて実施したために1講座当たりの受講生徒数が10人未満の場合もいくつか存在する。

4. クラスタ分析から見える生徒の選択履修の状況

(1) クラスタ分析の手順

本調査では2年次及び3年次の総合選択科目及び自由選択科目合計44単位に加えて1年次「芸術」科目内選択2単位について、生徒個人毎の選択科目名と単位数を把握し、クラスタ分析を行った。なお、B高校においては系列にそれほど厳密な区分は無く、生徒は3年次の総合研究の分野をもって自分の系列を意識している程度である。

クラスタ分析に使った変数は科目名であり、1年次芸術選択4講座、2年次及び3年次で開講された総合選択科目及び自由選択科目128講座の合計132講座を対象とする。その際、変数名は学習指導要領に基づく科目名を使用し、講座名は異なっても学習指導要領に基づく科目名称が同じであれば1つの科目にまとめ1変数として扱った。そのため、変数の総数は106個となっている。変数の値はその科目の履修単位数合計である。たとえば、科目「食品製造」は「手作り食品」、「発酵食品」、「食品技術」の3講座が各2単位で開設されており、選択の仕方によって「食品製造」の合計単位数は0、2、4、6単位となり、これを変数値としている。履修していない科目の変数の値はゼロとする。変数値の標準化は行わずそのままの値を使用する。個体間の距離は平方ユークリッド距離で測定し、非階層的クラスタ分析を使用する。

データを21個のクラスタに分類したところ、各クラスタに含まれる人数が60名から8名のクラスタが14個、3名が1個、1名が6個という結果を得た。3名以下のクラスタを除く14個のクラスタについて表2に示す。表内の数値はクラスタ毎の科目別平均単位数を示している。バーグラフは科目毎の最大取得単位数が同じ長さになるように調整された相対表示である。人数の大きいクラスタから順にその特徴をまとめ、クラスタの名称(履修型)を与えた。

表1 2・3学年の総合選択科目及び自由選択科目 (教育課程表より編集、原則履修科目及び必修科目は除く)

教科	講座名	学習指導要領に基づく科目名	2学年 総合 選択	2学年 自由 選択	3学年 総合 選択	3学年 自由 選択	教科	講座名	学習指導要領に基づく科目名	2学年 総合 選択	2学年 自由 選択	3学年 総合 選択	3学年 自由 選択	
普通科目							農業	フルーツガーデンング	果樹			2		
国語	国語表現	国語表現			2			ベジタブルガーデンング	野菜		2			
	現代文A	現代文A	2					フラワーガーデンング	草花			2		
	現代文B	現代文B	4					職業ライセンス α	農業機械	2				
	古典A	古典A	2					職業ライセンス β	農業機械			2		
	古典B	古典B			4			手作り食品	食品製造	2				
	発展現代文	学校設定科目			2			発酵食品	食品製造			2		
	探求現代文	学校設定科目			4			食品技術	食品製造			2		
	発展古典	学校設定科目			2			食品の科学 α	食品化学	2*				
古典講読	学校設定科目			2		食品の科学 β		食品化学			2			
地理歴史	世界史B	世界史B	4		4			微生物利用	微生物利用	2*				
	日本史A	日本史A		2		2		微生物バイオテック	微生物利用			2		
	日本史B	日本史B	4		4*			植物バイオテック α	植物バイオテクノロジー	2*				
	地理B	地理B			4			植物バイオテック β	植物バイオテクノロジー			2		
	世界史近現代	学校設定科目			4		食品流通	食品流通			2*			
公民	日本史近現代	学校設定科目			4		フィールドワーク	水循環			2*			
	倫理	倫理			2		ガーデンプラン	造園計画			2			
	政治・経済	政治・経済			4		グリーンデザイン	造園技術	2					
	時事問題	学校設定科目			2		生物デザイン	生物活用		2*		2*		
数学	数学II	数学II	4				グリーンライフ	グリーンライフ	2*					
	数学III	数学III			6		ワイン製造 α	学校設定科目	4					
	数学B	数学B	2		2		ワイン製造 β	学校設定科目			4			
	理系数学演習	学校設定科目			2		ワイン学	学校設定科目						
	数学II + I A 演習	学校設定科目			4		ビジネス基礎	ビジネス基礎	2*		2*	2*		
	数学I A 演習	学校設定科目			4		商品開発	商品開発	2*		2*	2*		
	数学I A 基礎演習 α	学校設定科目	4				広告と販売促進	広告と販売促進	2*		2*	2*		
	数学I A 基礎演習 β	学校設定科目			2		総合実践	総合実践		4*		4		
理科	物理基礎	物理基礎	4		4		簿記	簿記	4*		4			
	物理	物理			4		発展簿記	学校設定科目			4			
	化学基礎	化学基礎	4		4		情報処理	情報処理	4		4			
	化学	化学			4		ビジネス情報	ビジネス情報			4			
	生物	生物	4		4		プログラミング	プログラミング				2		
	応用生物	学校設定科目			4		文書デザイン	学校設定科目	2*		2			
	応用化学	学校設定科目			2		グローバルビジネス	学校設定科目	2*		2			
	応用物理	学校設定科目			2*		秘書実務	学校設定科目	2		2			
芸術	音楽II	音楽II	2				発達と保育I	子どもの発達と保育	2		2			
	音楽III	音楽III			2*		発達と保育II	子どもの発達と保育			2			
	美術II	美術II	2				リビングデザイン	リビングデザイン			2			
	美術III	美術III			2*		ファッション造形基礎	ファッション造形基礎	4		4*			
	工芸II	工芸II	2*				ファッション造形	ファッション造形			4			
	工芸III	工芸III			2*		服飾手芸	服飾手芸		2		2		
	書道II	書道II	2				フードデザインI	フードデザイン	2		2*			
	書道III	書道III			2*		フードデザインII	フードデザイン			2			
	書造形演習 α	学校設定科目	2				調理	調理			2			
	書造形演習 β	学校設定科目			2		生活文化	学校設定科目			2			
	美術造形演習 α	学校設定科目	2				社会福祉基礎	社会福祉基礎	2		2*			
	美術造形演習 β	学校設定科目			2		コミュニケーション技術 α	コミュニケーション技術	2		2*			
	実用書道	学校設定科目		2*		2	コミュニケーション技術 β	コミュニケーション技術			2*			
	楽しい書道	学校設定科目			2		介護福祉基礎	介護福祉基礎			4			
実用ペン字	学校設定科目			2		介護総合演習	介護総合演習			2				
総合書道	学校設定科目			2*		生活支援技術	生活支援技術			2				
総合美術	学校設定科目			2		トレーニング α	スポーツVI	2						
外国語	コミュニケーション英語II	コミュニケーション英語II	4				トレーニング β	スポーツVI			2			
	コミュニケーション英語III	コミュニケーション英語III			4		スポーツI	スポーツI			2			
	英語表現I	英語表現I	2				ニューススポーツ	スポーツII			2			
	英語会話	英語会話		2*		2	球技	スポーツII	2					
	英語基礎演習	学校設定科目			2		ゴルフ	スポーツII			2*			
	応用英語	学校設定科目			2		野外活動	スポーツV			2			
	フランス語	学校設定科目		2		2	音楽理論	音楽理論	2					
	中国語	学校設定科目		2*		2	ソルフェージュ α	ソルフェージュ	2					
ハンガール	学校設定科目		2		2	ソルフェージュ β	ソルフェージュ				2*			
情報	情報の科学	情報の科学		2*		2	音楽	音楽			2			
専門科目							美術 英語	器楽	器楽			2		
農業	栽培基礎	農業と環境	4					クラフトデザイン	クラフトデザイン			2		
	食品基礎	農業と環境	2					素描	素描			4		
	生物資源生産	総合実習			4			時事英語	時事英語			2		
	総合実習	総合実習			2			異文化理解	異文化理解		2		2	
	食品製造実習 α	総合実習	2					※各学年で開設しなかった科目						
	食品製造実習 β	総合実習			4									

(2)履修型の内容と特徴

①理系生化型(60名。内、男子24名、女子36名)

最も人数の多い履修型で、「化学基礎」を54名(90%)、「生物」を51名(85%)が履修し、さらに「応用生物」を45名(75%)、「数学II+数学I演習」を51名(85%)が履修している。「コミュニケーション英語III」は59名(98%)、「応用英語」は35名(58%)、「発展現代文」は47名(78%)である。

生物又は化学と数学、英語の3科目で受験を目指す履修型である。

科目の内容は、シラバス(1年次に「平成25年度版科目選択の手引き」として配布される。以下「シラバス」と称する。)によると以下の枠内に示す通りである。

- * 「応用化学」は「有機化学の基礎と化学基礎の発展学習及び問題演習」、「応用生物」は「生物基礎の発展学習及び問題演習」と記されている。
- * 「数学II+数学I演習」は「センター試験対策問題演習を行う」と記されている。
- * 「コミュニケーション英語III」は「長文読解を学ぶこと、大学・短期大学、看護・医療系受験者向け講座」で、「応用英語を併せて選択することでさらに力をつけることができる」とされている。
- * 「発展現代文」は「受験や就職試験で現代文が必要な人が選択すると良い」「探求現代文との重修はできない」とされている。「探求現代文」は「文系大学受験で現代文が必要な人が選択すると良い」とされている。

②家庭型(21名。内、男子0名、女子21名)

この履修型は全員が女子である。「生活文化」を18名(86%)、「服飾手芸」を16名(76%)、「ファッション造形」を11名(52%)など家庭科の科目を履修している。また、「発展現代文」を17名(81%)、「実用ペン字」を17名(81%)、「数学基礎β」を13名(62%)、「コミュニケーション英語III」を10名(48%)、「英語基礎演習」を10名(48%)が履修している。

家庭科系分野の進学を目指す履修型であるが、受験科目で英語を利用する層と利用しない層が見いだせる。⑩家庭保育型との差異は服飾ファッション系の科目の履修が多くなっていることである。

- * 「数学基礎β」は「数学I Aの基礎的問題(就職試験・一般教養程度)の演習を行う」、「英語基礎演習」は「基礎力の定着をはかる」「コミュニケーション英語IIIとセットで履修できない」としている。

③文系日本史型(21名。内、男子10名、女子11名)

「日本史B」を20名(95%)、「日本史近現代」を19名

(90%)が選択している。「コミュニケーション英語III」は21名(100%)全員が履修し、「応用英語」を4名(67%)が履修している。国語科科目の履修も多い。

3年次生で「数II+I A演習」を16名(76%)が履修しており、センター試験対応も見取れる。

国語、日本史、英語の3科目で受験を目指す履修型である。

④農業型(17名。内、男子10名、女子7名)

教科「農業」の専門科目である「総合実習」を17名(100%)全員が履修している。この科目は講座としては「生物資源生産」「総合実習」「食品製造実習α」「食品製造実習β」の4つで展開されている。そのため履修単位数は2~12単位の幅がある。また、「食品製造」を9名(53%)、「農業機械」を9名(53%)、「植物バイオテクノロジー」を8名(47%)、「ワイン醸造」を8名(47%)など、農業科目の履修が多い。また、「コミュニケーション英語III」を11名(65%)が履修し、「発展現代文」を14名(82%)が履修している。

農業分野や食品分野の履修が特徴的な履修型である。特徴的な受験科目を見いだすことはできない。

⑤スポーツ型(15名。内、男子4名、女子11名)

「スポーツI」を8名(53%)、「スポーツII」を11名(77%)、「スポーツIV」を9名(60%)が履修している。「コミュニケーション英語III」は15名(100%)、「英語表現I」は14名(93%)、「応用英語」を6名(40%)が履修しており、「数学I A演習」も11名(73%)が履修している。

体育系進学者向け科目の履修者が多い履修型である。

- * 「スポーツI」、「スポーツIV」は「体育系への進学志望者に役立つ」と記されている。
- * 「英語表現I」は「大学・短期大学、看護・医療系受験者向け講座」、「数学I A演習」は「センター試験および看護医療系対策問題を行う」と記されている。

⑥理系物化型(14名。内、男子12名、女子2名)

「数学II」「数学B」「数学III」「理系数学」「化学基礎」「コミュニケーション英語III」は全員が履修し、「化学」を13名(93%)、「物理」を13名(93%)、「物理基礎」を13名(93%)、「応用化学」を8名(57%)が選択している。

物理又は化学及び数学、英語の3科目受験で理系進学を目指す履修型である。

- * 「理系数学」はセンター試験対策演習を含み理工系進学者に受講を勧めている。

⑦外国語型(13名。内、男子6名、女子7名)

「コミュニケーション英語Ⅲ」を11名(100%)、「応用英語」を10名(77%)、「時事英語」を6名(46%)、「英語表現Ⅰ」を8名(62%)、「異文化理解」を2名(15%)、「フランス語」を3名(23%)が履修している。また、「世界史B」を11名(85%)、「世界史近現代」を11名(85%)が履修していることも特徴である。

外国語分野や地歴分野への進学を目指し、受験科目を世界史、英語、国語とした履修型である。

⑧政経簿記型(12名。内、男子6名、女子6名)

「時事問題」を12名(100%)、「発展現代文」を11名(92%)、「コミュニケーション英語Ⅲ」を10名(63%)、「簿記」を7名(58%)、「数学基礎β」を8名(67%)が履修している。

政経分野の学習を目指していると思われるが、受験科目としての特徴は見られない。

⑨福祉型(12名。内、男子1名、女子11名)

「コミュニケーション技術」「社会福祉基礎」「生活支援技術」は全員が選択している。「介護総合演習」を11名(92%)、「介護福祉基礎」を9名(75%)、「子どもの発達と保育」を7名(58%)が履修している。また、「音楽Ⅱ」を4名(33%)、「器楽」を4名(33%)、「声楽」を3名(25%)が履修している。さらに、「コミュニケーション英語Ⅲ」を11名(92%)、「発展現代文」を11名(92%)、「数学基礎β」を9名(75%)が履修している。

福祉分野又は保育系の進学を目指している履修型である。

* 「器楽」と「声楽」は「音楽系に進学したい人、幼児教育で実技試験のある人」と記されている。

⑩家庭保育型(11名。内、男子2名、女子9名)

「フードデザイン」を9名(82%)、「子どもの発達と保育」を8名(73%)、「食品製造」を7名(64%)、「総合実習」を6名(55%)、「調理」を5名(45%)が履修している。また、「コミュニケーション英語Ⅲ」を10名(91%)、「現代文B」を10名(91%)が履修している。②家庭型との違いは「子どもの発達と保育」履修者が家庭型19%に比べて73%と多いことで、「器楽」を4名(36%)、「声楽」3名(27%)が履修していることと併せて考えると、保育系を目指す者が含まれる履修型と思われる。

②家庭型と比較して、食品調理系の科目の履修が多くなっていることも特徴である。

⑪音楽型(10名。内、男子4名、女子6名)

「ソルフェージュ」を10名(100%)、「音楽Ⅱ」を8名(80%)、「音楽理論」を8名(80%)、「器楽」を7名(70%)、「声楽」を7名(70%)が履修している。また、

「コミュニケーション英語Ⅲ」を10名(100%)、「応用英語」を9名(90%)、「発展現代文」を8名(80%)が履修している。

音楽分野への進学を目指している履修型である。

⑫美術型(9名。内、男子0名、女子9名)

全員が女子である。「美術造形演習α」を9名(100%)、「美術Ⅱ」を8名(89%)、「素描」を8名(89%)、「美術造形演習β」を8名(89%)、「クラフトデザイン」を5名(56%)、「総合美術」を3名(33%)が選択している。また、「コミュニケーション英語Ⅲ」を9名(100%)、「応用英語」を3名(33%)が選択している。

美術分野への進学を目指している履修型である。

* 「美術造形演習α」と「美術造形演習β」は「美術系に進学したい人や深く学びたい人」に勧めている。

⑬地歴公民型(8名。内、男子4名、女子4名)

「日本史B」を6名(75%)、「倫理」を4名(50%)、「時事問題」を4名(50%)、「政治・経済」を4名(50%)が履修している。また、「コミュニケーション英語Ⅲ」を8名(100%)、「数学基礎α」を6名(75%)、「中国語」を4名(50%)、「ハングル」を4名(50%)が履修している。

地歴公民科目での進学を目指す履修型と思われる。

⑭ビジネス・スポーツ型

(8名。内、男子4名、女子4名)

「情報処理」を8名(100%)、「ビジネス情報」を7名(88%)、「プログラミング」を4名(50%)、「簿記」を4名(50%)が履修している。また、「コミュニケーション英語Ⅲ」を8名(100%)、「実用ペン字」を7名(88%)、「スポーツⅡ」を7名(88%)、「食品製造」を6名(75%)、「スポーツⅣ」を4名(50%)が履修している。

商業系分野とスポーツ分野の履修にいくらか集中している。しかし芸術、農業系の科目にも履修の集中が見られる。

なお、上記14個のクラスター型以外の少人数クラスター7個に含まれる9名は、「コミュニケーション英語Ⅱ」を選択しなかった者2名がそれぞれ1名のクラスターを形成し、「総合実践」を選択した者1名が一つのクラスターを形成するなど特異な履修型であり、分析から除外した。

(3)生徒の選択履修の特徴

上に見たように、履修型は生徒の興味・関心、進路希望及び必要な受験科目によって特色づけられる。大学進学、短期大学進学、専門学校進学により必要な受

験科目は大きく変化するし、同じ大学でも入試方式により必要な受験科目は全く違ってくるが、生徒たちは一般入試にも対応できるように考慮しながら選択科目を決めている。

必要な受験科目が色濃く反映しているのは理系生化型、理系物化型、文系日本史型、外国語型である。進路が理系進学の場合、理系生化型は受験科目に生物又は化学、数学、英語を必要としており、センター試験利用も考えて準備している。一方、理系物化型は化学又は物理、数学Ⅲを含む数学、英語が必要でセンター試験利用も準備した選択になっている。文系進学の場合は、受験科目に日本史、英語、国語を必要とする文系日本史型があり、受験科目に世界史、英語、国語を必要とする外国語型、受験科目に日本史や倫理や政治経済が必要な地歴公民型がある。

スポーツ型、音楽型、美術型は興味・関心が実技を伴う科目に色濃く表れ、その科目が同時に受験科目でもあることが特徴である。スポーツ型の「スポーツⅠ」や「スポーツⅣ」、美術型の「美術造形演習α」や「美術造形演習β」、音楽型の「ソルフェージュ」や「器楽」や「声楽」がこれに当たる。また国語科目「発展現代文」や英語科目が受験科目の必要に応じて選択されている。

選択科目が興味・関心を反映しているが直接の受験科目にはならず、上級学校進学に必要な科目の選択が別に並行してなされているのが家庭型、家庭保育型、農業型、福祉型である。家庭型では家庭分野全般に興味を示しながら英語を受験科目として準備している層と、教養程度の基礎的英語で十分な層が存在し、大学進学希望と専門学校進学希望が存在することが見て取れる。また、家庭保育型は食品調理分野と保育分野に

興味を持つ2つの層の存在が見て取れる。保育系進学と思われるグループでは受験科目である「器楽」と「声楽」の選択がみられるが、この科目を選択していないグループは食品調理分野の専門学校進学希望であると思われる。農業型は上級学校進学に必要な科目が明確に現れない専門学校進学が多いためと思われる。しかし、表2を細かく見ると受験科目として生物、化学を選択している生徒がわずかだが見いだせる。福祉型では必要な受験科目は国語科目「発展現代文」として見いだせる。

5. 履修型と総合研究及び進路種別の関係

総合研究(2単位)は13分野から選択し、分野に沿ったテーマを自ら設定し、研究を行うものである。分野は家庭科、理科、書道、地歴公民、商業、国語、外国語、音楽、美術、福祉、保健体育、環境科学、食品科学である。前項で分析した履修型と総合研究の分野の選択が整合的であるかについて検討してみる。

また、卒業後の進路を大学進学、短期大学進学、専門学校進学、公務員、民間企業就職、進学準備、家居に分類し履修型との関係を分析した。履修型と総合研究分野の関係については表3上段に、履修型と卒業後の進路のクロス集計については表3下段に示した。

(1)履修型と総合研究の関係

履修型と総合研究分野の整合性は総合学科の科目選択と学習が良好に機能しているかどうかの指標になると考えられる。表3から家庭型は62%が総合研究の家庭分野を選択し、理系物化型は86%が理科分野を、福祉型は92%が福祉分野を、家庭保育型は73%が家庭分野を、音楽型は80%が音楽分野を、美術型は67%が美

表3 履修型と課題研究の分野および進路種別 数値は人数

バーグラフは課題研究の分野においては全体を同じスケールで、進路種別においては履修型ごとの割合を示している。

クラスター番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
総合研究分野/ 履修型	理系生化 型	家庭型	文系日本 史型	農業型	スポーツ 型	理系物化 型	外国語型	政経簿記 型	福祉型	家庭保育 型	音楽型	美術型	地歴公民 型	ビジネス・ スポーツ 型
家庭科	6	13	3	5	5	2				8				
理科	23	2			1	12								
書道	2	2	2					1					1	
地歴公民	5		6				3	4				1	4	
商業	1	1	4					5					1	1
国語	1		3				1	1					1	
外国語	1		1		1		7	1				1	1	
音楽	2		1								2			
美術	1	2					1				8	6		
福祉	13	2							11					
保健体育	1		1		1	6		1		2				1
環境科学	3			6				1		1				5
食品科学	1			4										1
合計(231名)	60	21	21	17	15	14	13	12	12	11	10	9	9	8
進路種別/ 履修型	理系生化 型	家庭型	文系日本 史型	農業型	スポーツ 型	理系物化 型	外国語型	政経簿記 型	福祉型	家庭保育 型	音楽型	美術型	地歴公民 型	ビジネス・ スポーツ 型
大学	25	12	4	5	7	8	1	2	1	1	1	1	4	3
短大	7	8	6	1	4	1	2	3	5	5	2	1	1	1
専門学校	20	10	1	10	3	1		4	3	5	5	7	1	4
就職(民間)	1	3		2	1			3	2				1	1
就職(公務員)							1						1	
進学準備	6		2		1	4	2				1			
家居		1			1						1			
合計(227名)	59	20	21	17	15	13	13	12	12	11	9	9	8	8

術分野を、外国語型は54%が外国語分野を、地歴公民型は50%が地歴公民分野を、ビジネス・スポーツ型は63%が体育分野又は商業分野を、政経簿記型は75%が地歴公民分野と商業分野を、農業型は環境分野と食品分野を82%が選択しており、全体として履修型と整合性が見いだされる。

理系生化型は38%が理科分野を選択しているものの、22%は福祉分野を選択している。後者は看護医療系進学希望者を多く含むと考えられ、総合研究に看護医療分野が無いことから福祉分野を選択していると思われる。

スポーツ型は40%が体育分野を選択しているものの、33%が家庭分野を選択している。選択科目から見ると「子どもの発達と保育」を15名中6名(40%)が履修していることから、保育を目指す生徒たちが総合研究の家庭分野を選択したと思われる。

文系日本史型は29%が地歴公民分野であるが商業分野、国語分野、家庭分野、書道分野などに幅広く分布している。この履修型は総合研究の分野との間にきわだった関係が見いだせない。

以上のことから全体を見ると、B高校においては、選択科目の履修がまとまりを持ちながら、興味・関心及び進路希望と総合研究の分野がつながっている。その整合性は高く、ほとんどの生徒で学習が機能的に行われていると判断できる。

(2)履修型と進路結果の関係

各履修型の科目選択状況について、国語、地歴公民、数学、理科、外国語の各教科を「普通科目」とし、芸術、体育の各教科(1年次「芸術」は除く)を「普通科系専門科目」とし、農業、商業、家庭、福祉の各教科を「専門科目」の3つに分けて履修型毎の平均履修単位数を表4にした²。

これを見ると理系生化型、文系日本史型、理系物化型、外国語型、地歴公民型の5つの履修型は「芸術、体育」や専門科目の履修がきわめて少ないことが特徴である。専門科目の平均履修単位数は理系物化型ではゼロであり、他も2.5~5.5単位にとどまっている。これらの履修型は普通高校の理系進学や文系進学の履修状況に類似しており、総合学科の選択履修の中で普通高校に近い選択が行われている例である。これらのう

ち文系日本史型、理系物化型、外国語型、地歴公民型は表3の進路種別で大学進学者が多くなっていることも前述のことと符合する。残りの理系生化型では進路種別が大学進学者と専門学校進学に分かれているが、これは看護医療系(専門学校)進学希望者が多いためである。普通高校でも進学率の高い学校(いわゆる進学校)は大学進学者が多くなり、やや低い学校(いわゆる中堅校)では専門学校との二分化が見られるが、この点を見るとB高校は普通科中堅校と同じ進路結果を示している。また、理系物化型は卒業生13名中4人(30%)が進学準備(受験浪人)となっており、理系生化型、文系日本史型、外国語型にも1割程度の進学準備が見られるが、他の履修型には進学準備はスポーツ型に1名いるのみである。

一方、専門科目を多く履修しているのは家庭型、農業型、福祉型、家庭保育型、ビジネス・スポーツ型の5つの履修型である。専門科目の平均履修単位数は14.9~18.6単位であり、一定の量を学習しているが専門学科の専門科目履修単位数下限25単位にははるかに及ばない。しかも、この単位数には複数の学科の科目が混ざっているため、体系的な専門教育のレベルには達していない。

スポーツ型、政経簿記型、音楽型、美術型は上記2つのグループの中間に位置しており、「普通科系専門科目」の平均履修単位数は4.0~12.0単位である。普通高校で芸術科や体育科の専門科目はわずかしき設置されないことと比較して、その充実ぶりは注目に値する。音楽や美術分野の進学を考える際、普通高校では芸術分野大学進学用の予備校や個人レッスンを受けることがあるが、音楽型と美術型はその部分を補っている可能性がある。ただし、この分野でのB高校の進学は専門学校進学が中心になっていて、そのことは明確に見いだせない。

6. おわりに

もとより、総合学科では専門性を追求することよりも、「将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視」³することを目的として選択科目が組まれている。先に見た家庭型、農業型、福祉型、家庭保育型、ビジネス・スポーツ型は専門科目履修においては、自己の進路への自覚を深める動機付

表4 履修型と選択科目 数値は履修型毎の平均単位数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
選択科目 履修型	理系生化 型	家庭型	文系日本 史型	農業型	スポーツ 型	理系物化 型	外国語型	政経簿記 型	福祉型	家庭保育 型	音楽型	美術型	地歴公民 型	ビジネス・ スポーツ 型
普通科目	39.0	20.0	39.5	23.3	29.1	43.9	38.9	30.9	21.0	25.8	25.0	21.1	33.8	20.8
普通科系 専門科目	2.5	7.2	1.7	2.1	8.7	0.1	2.2	4.0	5.3	3.3	12.0	11.6	4.8	7.8
専門科目	2.5	16.8	2.8	18.8	6.3	0.0	2.9	9.2	17.7	14.9	7.0	11.3	5.5	15.5
合計	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0	44.0

けとなり、専門科目の履修による経験をしながら、将来の職業選択を視野に入れて進路選択しているように見える。また、スポーツ型、政経簿記型、音楽型、美術型では普通科系専門科目の履修により、普通科より手厚く実技を伴う受験科目への対応がなされ、興味・関心を深めるといった機能も見いだされる。そして、文系日本史型、理系物化型、外国語型、地歴公民型では総合学科の中に大学進学を目指す普通科でよく見られる類型が現れている。普通科では選択による増単位や課外補習によって演習問題等の受験学習に対応するが、B高校では学校設定科目を含む選択科目で対応している。国語、地歴公民、数学、理科、英語でその様子が見て取れる。

このように多様な生徒に対して、自己の進路を自覚的に見いだして進路選択していくことに、B高校の総合学科はうまく機能していると考えられる。

〈付記〉

本論文は、科学研究費(基盤研究C)「総合学科『産業社会と人間』の職業・キャリア教育の効果とモデル構築」(平成26-28年)(研究課題番号:26381286・研究代表者・太田政男)の研究成果の一部をまとめたものであることを付記する。

〈謝辞〉

本研究をすすめるにあたり、アンケート調査や聞き取り調査の実施に協力を賜ったA県立B高校の校長先生はじめ教職員、高校生の皆様に心より謝意を表す。

〈参考文献〉

- 佐々木享, 1976『高校教育論』大月書店
堀内達夫他編, 2013年『日本と世界の職業教育』法律文化社
大河内信夫, 1999「高等学校総合学科の教育課程の実態を理解するために」『技術教育研究』(54)
大河内信夫, 2000「高等学校総合学科の科目選択の実態と進路との関係: 複数の職業学科をもつ専門高等学校から改編した事例」『産業教育学研究』30(2)
寺田盛紀, 1995「総合学科の教育課程と進路選択・職業教育機能に関する比較研究」『産業教育学研究』第26巻1号
阿部英之助・原健司・林萬太郎, 2014「総合学科における「職業教育度」と「母体校の編成」との関係」『和歌山大学教育学部紀要』第64集
小西尚之, 2014「高校生はいつ、どのように進路を決めるのか—継続的調査における進路未定者の特性と動向—」『北陸大学紀要』(38)
小西尚之, 2016「高校在学中から卒業後にかけての職業観の変化—総合学科卒業生に対する追跡調査から—」『北陸大学紀要』(40)

〈注〉

- 1 英語基礎演習という科目が「科目選択の手引き」に3年次生2単位選択科目として存在し開講されている。参照した平成25年度入学者教育課程表にはこの科目名は存在しなかったが、学校設定科目、総合選択科目に分類し表1を作成した。
- 2 芸術必修選択科目である、音楽I、美術I、書道I、工芸Iは含まない。そのため各履修型の合計は44単位である。
- 3 文部省初等中等教育局長通達, 平成5年3月22日, 「総合学科について」